



平成24年2月27日

ジュシンプッジ

卓話 『樹心佛地』

羽山 泰弘 様

皆さんこんにちは。私は7年前、仕事先の青森で脳梗塞の発作を起こしました。仕事が終わって、さあ祝杯というときに何となく食欲がなくて右の頬が痙攣するんです。翌朝、後輩にその話をしたら、男の人が顔に痺れが来たときは要注意だと聞いたことがあると言って、早速知り合いの医者に連れていかれました。その先生は私の顔を見て、俺の手には負えないからすぐ病院へ行きなさいということで、即入院となりました。脳梗塞というのは症状が1分ごとに進むらしくて、病室で点滴を始めると同時にこん睡状態になり、気がついたのは2日後。目が覚めたら動けないんです。右目は潰れ、顔が右に垂れ下がり言葉が出ない。後輩の電話で飛んできた家族は私の姿を見て泣き崩れました。

それからリハビリが始まりました。リハビリの先生は「この病気、みんな俺たちを頼りにするけど自分で治さないと治りやしない」と言うんです。私は旅先でもあり、転院先を探して厚木の七沢リハビリテーションに移りました。そこでは医者言うとおり何でもやりましたが、医者と一緒にするのは一日のうち1時間かそこら。私は青森の先生を思い出し、これは自分でやるしかないということで2ヵ月半で退院してしまいました。

そのとき覚えたことですが、まず言語障害。私、幸い般若心経を唱えることが出来たものですから、それを人のいない屋上や林で大口を開けてやっただけです。それで段々声が出てきた。足も、車椅子を買って言われましたけど、まだ64だと。70、80まで生きるんだという執念で頑張りました。意志だけで治ったとは思いませんけど訓練に訓練

をして。訓練って簡単に言いますけど痛いんですよ。腕を10度上げるだけでも痛い。電車でも出来るだけ坐らないで吊皮につかまる。左手で右手を持ち上げるんですけど力がないからすぐ落ちちゃう。それを何回も繰り返す。そうするうちに握力が5キロ、10キロついてきて、今20キロまで戻りました。

今日のタイトル、紀野一義という仏教の大学の学長だった人が「人の心に旗を立てる 人の心に火を灯す」と意識してくださっています。親鸞の言葉で、狭い心の私たちにもっと視野を広くしていきなさいというような意味です。私のリハビリの話でいえば自分で治すという意識がどれほど大きな力になるかということだと思います。

ショーペンハウアーの随想録に、やまあらしのジレンマという話があります。やまあらしの家族が冬を迎え、身を寄せ合って温め合おうとするとお互いの針が痛くて離れるんですね。でもやはり寒くて近づくともた刺される。それを繰り返すうちに、ほどほどの痛みを我慢しながら、ほどほどの距離で暖をとることが大事だと気付く。最近、世の中で孤立して生きている人が多いでしょ。人の刺が痛いから人に近づかない。でも自分も自分の都合という刺を持っている。そこに気付くともっと楽になるんじゃないでしょうか。

ありがとうございました。

